



FACTBOOK





目次

- P.3 - 4 公営競技の新たな可能性を未来へ
P.5 - 14 競輪場のある街に住みたい
そう思われる街へ
P.15 - 18 変わりゆく千葉
P.19 地域に愛される競輪場を目指して
P.20 アスリート育成のゲートウェイへ
P.21 - 22 JPFのアスリート育成
P.23 - 24 JPFの事業管理
P.25 - 26 CEOメッセージ
P.27 - 28 各運営場の今
P.29 新たなビーチカルチャーの創造へ
P.30 スポーツ×農業で持続可能な社会へ
P.31 - 32 JPFの人材育成
P.33 - 34 JPFのビジョン
P.35 - 36 JPFのミッション
P.37 - 38 会社概要



公営競技の 新たな可能性を未来へ

私たちは、写真判定をはじめとする公営競技の運営支援を通じて、競輪・オートレース・ボートレース・競馬といった公営競技を支えてきました。ただ競技を楽しむ場を提供するだけでなく、公営競技を通じて街を元気にし、公営競技場を地域の方々に愛される存在へと進化させることが、私たちの使命です。

近年、公営競技の在り方は大きく変わりつつあります。公営競技場は、単なるレースの開催地にとどまらず、子どもたちが安心して遊び、親子でスポーツを楽しみ、地域の人々が集う場所へと生まれ変わる可能性を秘めています。公営競技場があることで、地域の価値が高まり、人々が「この街に住みたい」と思える場所へー。

その実現のために、私たちはこれからも課題に向き合い、公営競技の持つ可能性を最大限に引き出していくます。

競輪場のある街に住みたい そう思われる街へ



迫力あるスポーツを
間近で観戦できる街



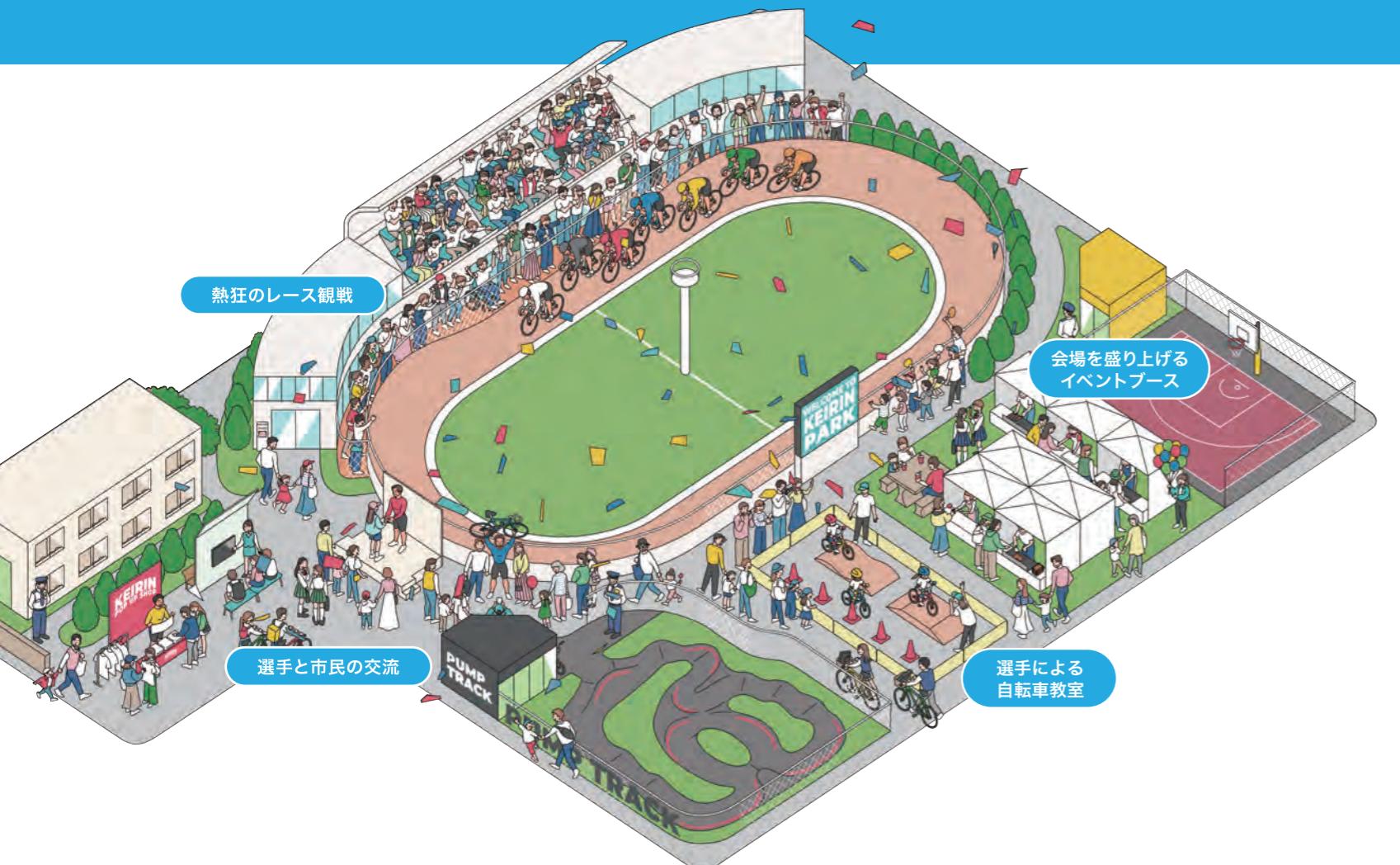
子どもがさまざまな
スポーツを通じて
成長できる街



地域住民同士の
交流が生まれる街



災害に強く、安心・安全で
住みよい街



迫力あるスポーツを 間近で観戦できる街

競輪場からスポーツ施設へ

競輪をもっと魅せるスポーツへ

私たちJPFでは競輪場が街にあることにより活気をもたらし、地域の発展に貢献できるよう取り組んでいます。ギャンブル場の印象が色濃く残る競輪場ですが、どのスポーツよりも間近で選手の戦う姿を観戦できる臨場感あふれるスポーツ施設もあります。

自転車競技の歴史は古く1896年の第1回アテネオリンピックから実施され、ヨーロッパを中心に非常に人気の高いスポーツです。中でもケイリンは日本発祥であり人気も

高く、ケイリンに特化した施設として千葉JPFドーム(現TIPSTAR DOME CHIBA)を建設しPIST6という新しいケイリンレースを始めました。最近はオンラインベッティングの普及に伴いモーニングやミッドナイトの開催も増えてきました。ミッドナイト開催ではナイター照明を生かした照明演出なども今後の競輪開催を盛り上げていく一翼を担っています。

スポーツ観戦の醍醐味といえば生の迫力と臨場感。競輪には整備されたルールと鍛えられた肉体を持つ選手の存在が欠かせません。より選手を知ってもらうために、JPFで運

営を行っている競輪場では地元選手との交流機会を増やしています。選手から自転車の乗り方を教わったり、地域のイベントに参加してもらったりしながら選手のファンを増やし競輪場へ応援しに訪れてもらうサイクルをつくっています。

競輪を取り巻く時代、地域、生活スタイル及びトレンドの変化に合わせてリニューアルし、もっと魅せるスポーツへと発展させていきます。



選手を知り、交流し、 競輪観戦で応援する好循環を

地域に密着したスポーツはさまざま存在し、競輪場や競輪選手もその一つです。JPFでは地域に開かれた競輪場を目指して、バンクを開放することをきっかけに、場所と選手を知ってもらい、もっと自転車に興味を持ってもらうための試みを行ってきました。

例えば、バンク開放から始まった取り組みの一つに当社が運営するサイクルクラブがあります。サイクルクラブで



は自転車を趣味として楽しむために参加する方が多い中、プロの選手を目指す子どももいます。地域のサイクルクラブから競輪選手が誕生すれば、一緒にバンクを走った仲間を応援しようと競輪場に足を運ぶという流れができてきます。プロの選手たちは、地域のお祭りへの参加や子ども向け補助輪外し教室の講師、バンク走行体験の指導やフォローを行ってくれるなど積極的に地域の方々と交流を図り、特に自転車の楽しさを教えてくれています。選手を知り、交流し、競輪場で応援するという好循環をJPFでは創り出しています。



子どもがさまざまな スポーツを通じて 成長できる街

競輪場が子どもの成長につながる施設へ

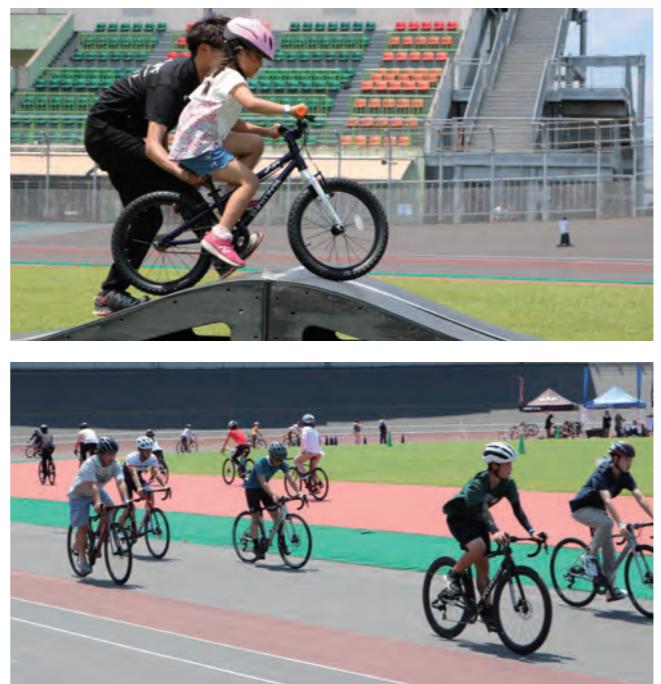
スポーツに親しむ環境を提供

私たちJPFではスポーツを推進する活動の一環として、バンクの一般開放やパンプトラックをはじめ競輪場を活用したさまざまなスポーツ推進活動を実施しています。

競輪場×自転車という親和性の高い自転車振興からスタートしましたが、近年、競輪場のスポーツ施設としての需要も高まっており、総合型スポーツ施設への改修工事も増えています。

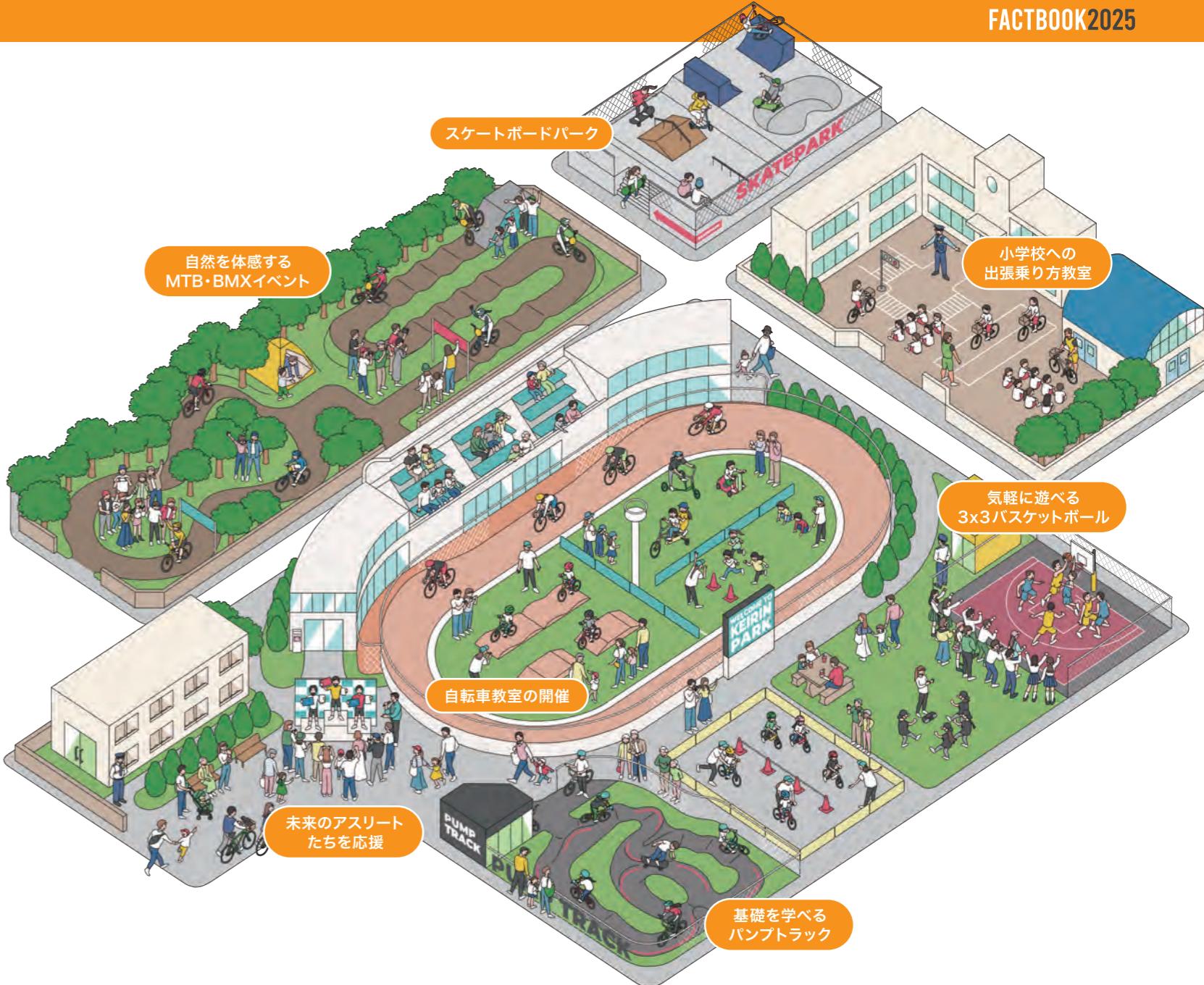
また東京オリンピック以降、アーバンスポーツの人気が高まっている傾向もあり、スケートボード、BMX、3x3やボルダリングなどで楽しむことができるアーバンスポーツパークも増えています。世の中のアーバンスポーツ需要から当社では常設や移動式のパンプトラックを活用して多くの子どもたちがスポーツを楽しめる活動を行ってきました。特にBMXは幼い時から親しみやすい自転車として普及活動に力を入れています。

私たちは幼少期の運動能力の発達に特に注目しています。他社と協力しながら、子どもたちがスポーツを通じて運動能力と思考力を養う事業を始動させました。また、スポーツ庁や各研究によると、6歳ごろまでの幼少期に大人の約8割程度まで運動能力が発達すると発表されており、JPFとしても幼少期の子どもたちへ運動の場を提供していくことやスポーツを楽しいと感じる環境づくりを目指しています。



子どもたちに スポーツの楽しみを知ってもらう

幼い頃から自転車に親しむことで、自然とバランス感覚を身に付けていくことにもつながります。特にキックバイクでは両足で蹴りながら進んでいくものの、バランスを保ちながらスピードを出していくないと上手に前に進みません。両足の感覚を上手に使いながら自転車を扱うことで、他のス



ポーツにも応用できるようになると私たちは考えています。自転車を楽しむ・自転車を楽しみながら養った運動能力と思考力を活用して自転車競技に限らずいろいろなスポーツを楽しんでほしい思いで事業を推進しています。他のスポーツにも触れる取り組みとして他社と連携したスポーツ体験イベントを開始しました。かけっこ教室やさまざまな運動を取り入れながら楽しく学ぶことのできる機会を提供していきます。

また、近年では子どもたちの部活動や公園利用の状況も昔と比べて大きく変わっており特に部活動に関しては、政府が学校以外との連携を強めていくことを打ち出しています。JPFとしては、競輪場のバンク開放により地元の子どもたち、特に自転車競技部に所属する高校生や大学生が練習に来る機会を創出しました。地元の競輪選手から自転車の乗り方を教えてもらうなど、選手との交流の場にもなっています。



地域住民同士の交流が生まれる街

市民交流の拠点へ



競輪場のイメージ刷新、それはもう始まっています

当社の運営場では、地域の方々に「競輪場があつてよかったです」と感じていただけるよう、多彩な取り組みを実施しています。競輪場は本来、地域のために存在するべき施設であり、地域の皆様に親しまれる場所であることが私たちの目指す姿です。

かつては、競輪場が競輪開催のためだけに利用され、多くの地域の方々にとっては足を運びづらい場所であったかもしれません。しかし、私たちはそのイメージを刷新し、競輪場を地

域の交流拠点として発展させることを使命としています。

今後、当社運営場の施設整備時には、子どもたちが遊んだり運動したりできるスペースの拡充、大人もくつろげるカフェや飲食店などの場内サービスの充実も視野に入れていきます。このように、競輪場が託児所や学童が持つ機能を補完していくことで、親世代の方々にとっても安心して子どもたちを預けられ、自分の時間を有意義に使えるという利点が生まれます。

競輪場をより多目的に活用していくため、スポーツ施設としての拡充はもちろん、周辺施設との連携を図りながら複合施設としての整備も推進していきます。地元企業や団体との連携を



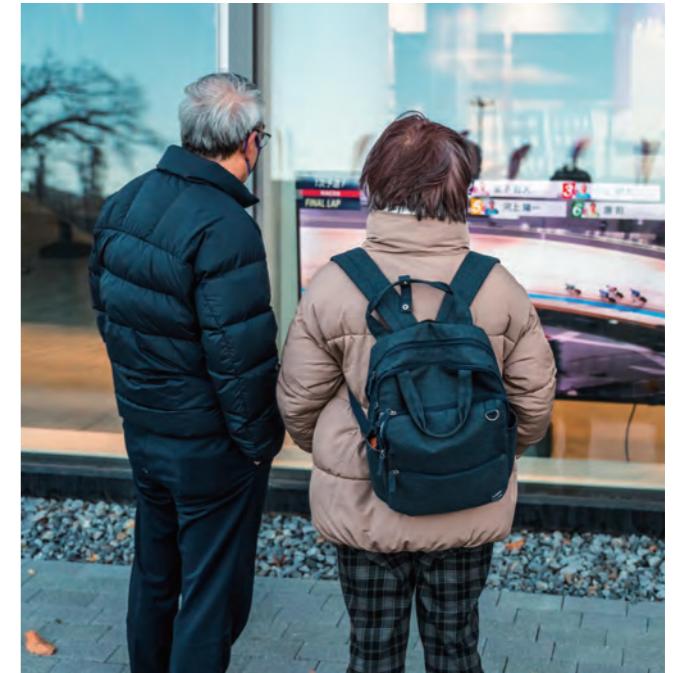
さらに強化し、地域の魅力を発信する共同イベントの開催や、競輪場を中心とした地域観光の提案など、これらの施策により、地域全体のにぎわい創出や経済活性化を目指します。

敷地・施設を最大限活用できるハード面・ソフト面の環境を整備し、市民が集まるエリアづくりを行います。より開かれた競輪場とすることで、競輪開催に留まることのない更なる施設価値の向上が見込めます。

JPFらしい、地域に開かれた競輪場を目指して

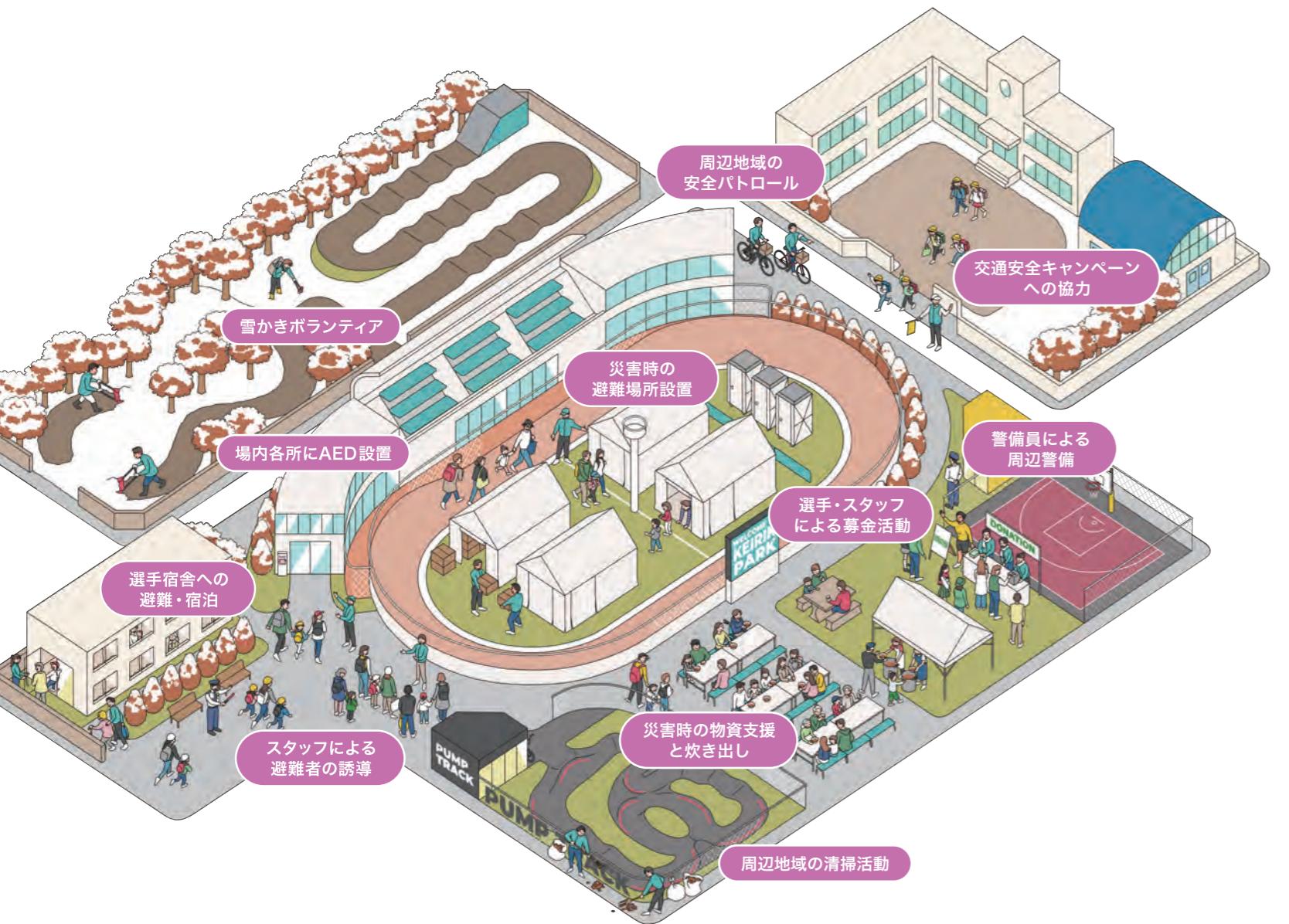
昨年度も当社の運営場にてさまざまなイベントを実施し、多くの地域の方々に足を運んでいただきました。季節ごとの地域のお祭りや地域商店街・飲食店との共同イベントなど、年間を通して定期的に開催することで、地域との繋がりを強化してきました。さらに、競輪場外でも認知拡大を目的とした活動を積極的に行ってています。その一つが、社員による出張授業です。競輪場で働く社員や自転車競技アスリートとして活躍してきた社員が小学校や中学校に出向き、子どもたちに自転車競技や競輪場で働くことの魅力を伝えています。競輪場という施設だけにとどまらず、地域の皆様との接点を増やしていくことで来場へのきっかけに繋げています。

私たちが目指すのは、従来の競輪場の枠組みを超えて、地域の皆さんとともに“JPFらしい競輪場”を形にしていくことです。それは、地域社会への還元であり、競輪場運営をお任せいただいている私たちの責務であると考えています。



災害に強く、安心・安全で 住みよい街

収益を財源に地域社会を豊かに



財政への貢献と収益の還元

競輪場で得られた収益の一部は一般会計に繰入れされて福祉や教育関連をはじめインフラ整備など地域の皆様の身近な生活に役立てられています。

また、当社の運営場では、収益を利用して、施設整備の実施、各種イベントの開催や協賛など地域の方々に還元する施策を実施しています。

これらの財政貢献、収益の還元を通して競輪場がある街の暮らしやすさ、価値向上に貢献していきます。そのためには、公営競技場自体の収益確保を盤石のものとすることが必要不可欠です。

これからも、更なる利便性の向上や顧客満足度向上のため、運営の改善や新規サービスの開発に取り組んでいきます。

安心・安全で住みよいまちづくり

競輪場では周辺地域の警備、交通整理および巡回などをおこなうことで地域の防犯対策や渋滞緩和に貢献しています。また、周辺清掃や地域清掃活動への参加など環境美化にも取り組んでいます。積雪が多い地域では周辺の除雪作業なども行っています。競輪場以外においても競輪選手やスタッフが警察による交通安全運動、防犯活動や消防署による防災キャンペーンへ参加するなど、安心・安全なまちづくりに協力しています。警備員はもちろんスタッフが常駐しているため犯罪発生時に被害者の駆け込みがあった場合などでも迅速に対応することができます。これらのメリットを安定的に提供するために今後は地域の方々、関連団体などと更なる協力関係を構築していきます。



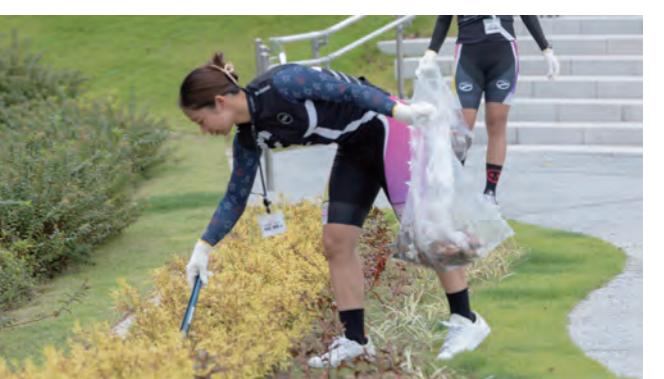
多様な働き方、 市民が活躍するチャンスを創出

競輪場は競輪選手や運営スタッフ・警備員など、多くの関係者が働く雇用の場でもあります。元競輪選手のセカンドキャリア採用をはじめ、アスリートのセカンドキャリア採用や現役アスリートのデュアルキャリア採用などにも積極的に取り組んでいます。また、シニア社員制度など、高齢になっても働き続けられる制度も推進しています。競輪場の運営を通して、雇用機会の創出や市民が活躍するチャンスの拡大に積極的に取り組んでいます。

防災に役立つ施設

競輪場は災害時には広域避難場所として指定されています。当社の運営場では定期的な防災訓練の実施や救命講習の受講などをおこなっています。JPFが運営する施設では全場にAED(自動体外式除細動器)を備えています。また競輪場には選手宿舎があり災害時には避難場所、宿泊場所として利用することができます。災害発生時には競輪選手、スタッフがボランティア活動への参加、募金活動を行い義援金の寄付なども実施しています。

地域と連携した避難訓練・防災訓練の実施や避難物資の備蓄など、地域との連携をさらに強化することで、防災施設として地域の皆様に安心感を与えられる施設運営を目指します。





競輪場の枠を超えて ～千葉ドームが切り拓く新時代～

私たちJPFは「競輪場がある街に住みたい」と思っていたただけるような施設運営をビジョンとして掲げています。このビジョンを具現化したモデルケースになりうる場所、それが千葉JPFドーム(現TIPSTAR DOME CHIBA、以降千葉ドーム)と千葉公園を含む現在の千葉です。

千葉競輪場はかつて廃止の動きがありました。競輪場をさまざまなスポーツの拠点にすることで地域活性に貢献したいという私たちの考えを千葉市や市民の皆さんに説明し、理解をいただいたうえで建て替えを行い現在の千葉ドームが完成しました。建て替えにあたっては、自転車トラック競技を開催できる施設を前提とし、国際規格である木製の250mバンクを備えたことで、国際規格の自転車競技ルールに準拠した新しい公営競技である「PIST6」を実施している日本で唯一の競技場に生まれ変わりました。

日本発祥の国際スポーツであるケイリンに特化した施設は国内でも数少ないため、トラック競技の国際大会開催や世界で戦える選手の育成につながる場としても、千葉ドームの活用が期待されます。また、国際規格のケイリンとスポーツベッティングが楽しめる唯一の場所としての強みを生かし、地域に根差したスポーツ文化の発展に貢献していきます。

このように、競輪場=ギャンブル場のイメージからスポーツ施設としての新たな価値を生み出すことで地域の方々に誇りを持っていただけるような施設へと変えていくために、千



葉ドームではさまざまな取り組みに挑戦しているのです。

千葉ドームは、建て替えにより施設の美観と機能性が向上し、地域の方々にも受け入れられやすくなりました。また、昨年春には千葉ドームに隣接する千葉公園「芝庭」の整備が完了し、その中にパンプトラック(PIST6 PUMPTRACK CHIBA、以降 PPC)がオープン。これにより千葉ドームには PIST6 ファンのみならず千葉公園や PPC をきっかけとして来場されるファミリー層も増加傾向にあります。

ケイリンのレースが開催されているすぐそばのPPCは子どもたちが自転車競技に触れ、学ぶことができる。その様子を親は公園でゆったりとした時間を過ごしながら見守っている。千葉ドーム内で親子揃って楽しめるイベントに参加し家族みんなでPIST6を楽しむ。そんな新しいスポーツの楽しみ方を提供していきたいと考えています。

千葉ドームは競輪場からスポーツ施設としての発展を目指す一方で、その他の活用も期待できます。電飾設備や音響設備、配信設備、カフェやバーも兼ね備えているため、音楽イベントや地域イベントを開催することも可能です。多様な用途に使用できる総合型スポーツエンターテイメント施設としての認知も拡大していき、千葉ドームが「千葉県民なら一度は訪れたことがある場所」として地域の方々の誇りになっていけたらと考えています。

千葉公園の進化とPPCの挑戦

千葉市や他社と共同で行った千葉公園「芝庭」整備事業が昨年春に完了し、オープンしました。この事業は第40回都市公園等コンクールにて日本公園緑地協会会長賞を受賞しています。

当社は千葉市自転車を活用したまちづくり条例の、「環境負荷軽減、健康増進、地域活性化への理解促進」「安全、快適かつ自発的な自転車活用」を推進するという基本理念に共感し、これを実現するための事業を積極的に行ってています。具体的には、ドーム前広場、ドーム内及び昨年春に新設された千葉公園内のパンプトラックにて子どもたちを対象とした自転車を利用した教室やイベントを実施しています。スポーツや競技としてのトラック、ロード、BMX及びMTBなど各種目の違いや楽しみ方を紹介したり、実際に体験してもらう機会を提供しています。

パンプトラックを自転車で走行するにはさまざまな技量が必要であるため、コーディネーション能力（リズム能力、バランス能力、識別能力など）が身にきます。この能力は自転車競技のみならず他のスポーツをするときにも根幹となる能力もあります。当社は、「幼少期からパンプ



トラックに親しむことにより子どもの運動能力を向上することができる」という考えのもと、パンプトラック事業に力を入れているのです。また、競輪レースを開催しているドームのすぐ隣で気軽にパンプトラックに親しめるというのもポイントです。自転車を単なる移動手段としてではなくスポーツとして認知できると共に、自転車をスポーツとして本格的に始めた子どもたちへ競輪選手を将来の職業選択の一つとして提示することができると考えています。

このように、パンプトラックと競輪場は親和性が高く、これらが隣接していることで相乗効果も期待できます。私たちJPJFはこの相乗効果を利用して地域活性につなげ、ゆくゆくは競輪場がある街に住みたいと思っていただけるよう、より良いまちづくりに貢献していきます。

千葉ドームから広がる地域の輪

千葉公園がリニューアルした昨年春に千葉中央警察署や千葉県交通安全協会の協力のもと開催された「PIST6 交通安全自転車フェス」では交通安全教室を実施し、フェス全体を通して地域の方々約670人が来場されました。

このフェスでは、基本的な交通安全啓発のみならず、自転車の整備点検や基本的な走り方、ブレーキ操作などを学ぶコンテンツを実施。また、自転車シミュレーターブースを設置したり、キックバイクでバンク内を走るイベントも実施しました。

7月、8月には「PIST6 夏遊び 2024」を開催。計6日の開催で合計来場者は約6700人を超みました。

子どもたちに楽しんでもらえるよう定番の縁日を用意したほか、アリーナ内にやぐらを設置し、普段選手が走行するバンクで盆踊りを実施するなど競輪場ならではのユニークな企画も行いました。また、競輪選手のトークショーを実施するなど、PIST6ファンにも楽しんでいただけるイベントとなりました。

このように、私たちJPJFは、競輪場でありながらもその用途に限らず地域の方々を対象としたイベント開催に力を入れており、幅広い世代の方が集い交流できる場を提供することを目指しています。



未来のトップアスリートを育む競技場

PIST6に限らず、高校生や大学生の大会会場としても活用されています。

オリンピックや世界選手権が開催される競技場は国際規格である木製の250mバンクと定められています。千葉ドームはこの規格を満たす国内でも数少ない競技場です。

そのため、千葉ドームで競技をすることは競技力向上や実践的な経験の提供に大きな役割を果たしているといえます。実際に2023年と2024年には全日本大学対抗自転車競技選手権大会の開催地となっており、今後も国際大会や全国規模の大会などを開催できる『国際規格の自転車競技場』として認知されることを目指します。



YouTuber ヒカル氏 × PIST6 ～新時代の幕開け～

昨年PIST6の認知向上に大きく貢献したものとして、YouTuberヒカル氏とのコラボが挙げられます。コラボ後の初動売上が約4倍、会員数は約5倍に増加し、若年層の来場者が大幅に増加しました。YouTuberヒカル氏にPIST6紹介動画を制作いただいたほか、PIST6のレース実況ライブ配信を行っていただきました。

本コラボによりPIST6の認知が進みましたが、私たちは現状に満足することなく、今後もPIST6を幅広い世代に知ってもらうための施策を続けていきます。



松阪競輪

地域に愛される競輪場を目指して



松阪競輪場の包括委託業務を受託したのは2013年。当時、「開かれた競輪場に」という目標を掲げ、単に競輪場としての機能だけを果たすのではなく、ファミリー向けイベントを継続して企画するなど、地域に根差した施設運営を行ってきました。その結果、さらに10年間の包括委託業務を受託することができました。これは、今までの私たちが目指し続けていた「開かれた競輪場に」という目標が形になり、松阪競輪場が地域の方々に必要とされつつあるということだと考えます。今後の10年は現状に満足することなく、「開かれた競輪場に」から発展した次のステージである「競輪場が近くにあってよかった」と思っていただけるような施設運営を目指していく。そのためには、競輪場に新たな価値を生み出すことが求められます。当社が運営している他の競輪場(千葉ドーム)



ムを含む)のように競輪だけでなく多様なスポーツに触れられる場を整備し、競輪場=ギャンブル場としてではなくスポーツ施設として来場者を増やし、スポーツに触れ、学ぶことができ、幅広い世代間の交流も生まれる、そんな場所を目指します。

松阪市が提唱している「子育て一番宣言」や、高齢者がいつまでも安心して暮らすことができる地域への取り組みとして「地域包括ケアシステム」があります。これらの取り組みを行うことは、私たちの「スポーツを通して街を元気にする」という事業理念と一致しています。親子で参加できる補助輪外し教室を開催し子どもたちにスポーツの機会を提供したり、パンク自転車乗車体験やパンクウォークを通して高齢の方にも生涯スポーツとしての自転車を楽しんでいただくことで、健康増進の機会を提供していきます。さらに、幅広い世代間の交流の場として活用していくよう、多目的エリアにフードコートやコンビニエンスストアを設置し、来場者が快適に過ごせる環境を整備する計画を立てています。これらの活動を通して松阪市の施策に協力していきながら、当社としても「競輪場があってよかった」と思っていただける施設運営を行っていく考えです。

私たちJPFは、競輪場だけれども競輪だけではない「スポーツの拠点」、「交流の場」として、地域の方々が「一度は訪れたことがある」新しい形の競輪場として、地域に根差した施設となるよう、努めています。

名古屋競輪

アスリート育成のゲートウェイへ



当社は2021年より、名古屋競輪場の包括委託業務を受託しました。ちょうどその頃、2026年に行われる第20回アジア競技大会のBMXレーシングの開催候補地が検討されていました。そこで私たちは、名古屋競輪場の建屋で一番古かった東スタンドを含む「東広場」と言われていたエリアをBMXレーシングのコースに再整備することを決断。本格的な会場誘致を行い、見事BMXレーシングの開催地に決定しました。昨年1月から開始した解体工事は今年1月時点で完了し、現在は今年7月の完成を目指し鋭意建設中です。

国際大会を開催できるBMXコースは国内に数少なく、あつたとしてもアクセスしにくい場所にあることが難点でした。新幹線停車駅の近くに位置し、都心からアクセスしやすい場所にある名古屋競輪場にBMXコースができるということは、多くの人々が来場しやすくなり、親しみやすさが増し、競技全体を盛り上げるということに繋がります。

競輪場を含めたトラック競技場のすぐそばにBMXコースがある施設は日本国内ではありませんが、自転車競技が盛んな海外ではよくみられる光景です。トラック競技とBMXは親和性が高く、併設することにより選手の育成や強化など期待される相乗効果は極めて高いといえます。

BMXは幼少期から楽しめる競技ですが、上達するためにはさまざまな技量が必要です。BMXで養えるコーディネーション能力(リズム能力、バランス能力、識別能力など)は自転車競技だけでなくその他のスポーツにおいても根幹となる能力で

あるため、幼少期からBMXに親しむことで将来的にさまざまなフィールドで活躍できるアスリートの育成につながります。この考え方リンクする考えとしてアスリート育成パスウェイが存在し、私たちJPFは「競輪場を中心としたアスリート育成パスウェイを実現させる」ことで自転車競技をはじめとするキッカケを提供しています。競輪場を中心としたアスリート育成の過程で一人でも競輪選手が誕生すれば、競輪業界の利益としても還元され、また新たなアスリート育成に繋がることができる好循環が生まれると考えています。



私たちJPFは名古屋競輪場を「自転車競技発展への足掛かり」として、また「アスリート育成パスウェイの循環を体現する場」のモデルケースとして、その他の競輪場でもこの要素を活かした事業を行っていくことを目指しています。

JPF | ATHLETE PATHWAY

JPFのアスリート育成

JPFが考える アスリート育成 パスウェイ



自転車に乗る

移動手段として自転車を利用する



自転車で遊ぶ

自転車に乗り、楽しむ

スポーツとして 楽しみ始める

自転車を好きになり
より時間を費やす



JPFでは、幼少期の子どもたちに向けて
オフロード種目を中心に普及・育成を行っています。

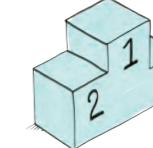


ワザ・速さを磨く

大会での目標達成のために
トレーニングをする



大会に出る



勝ちに行く



世界で戦う

生涯スポーツ・娛樂として楽しむ

サイクルスポーツ人材の 育成に向けて

私たちこれまで競輪場での自転車推進活動に注力していました。パンクを開放し、地域の方々や子どもたちが気軽にそして安全に自転車に乗って楽しむ環境をこれまで作ってきました。これまで実施してきた活動の中には、子ども向けの補助輪外し教室やBMX・MTBの体験会など、補助輪が外れたあともスポーツバイクで楽しむことができる取り組みや、友達とレースする楽しさを知ってもらうための走行会や記録会なども各地で実施。現在では当社を代表する活動の一つとして自転車振興事業が成り立っています。特に、公益財団法人日本自転車競技連盟が提唱するアスリート育成パスウェイの考えに賛同し、昨年度当社として注力していく対象を示すためJPFアスリート育成パスウェイが完成しました。私たちは主に自転車競技や自転車振興活動をより多くの人に知ってもらい楽しんでもらうことを目的に活動を行っています。先に取り上げた補助輪外し教室やBMX・MTB体験会は初めて自転車に乗る子どもたちや、自転車を移動手段としてではなくスポーツとして楽しんでもらうための取り組みを実施。今ではリピーターとして競輪場に来場する子どもたちも増えています。

またアーバンスポーツ人気も相まって、BMXの普及活動にも当社が一翼を担っている部分があります。京都向日町競輪場ではBMXフリースタイルのパークが常設されており、BMXの乗り方から上級者向けにはジャンプなどの技もレクチャーしています。昨年度春には千葉ドームの横にパンプトラックが完成し、体験会や講師を交えた教室、さらには有名選手とタイム対決ができるイベントなども開催しました。2025年夏頃には名古屋競輪場に隣接したBMXレーシングのコースが完成予定となっており、BMXを中心とした自転車振興活動が当社内でも勢いを増しています。当社でBMXを推進している理由の一つに5~6歳の幼少期から本格的に始められる

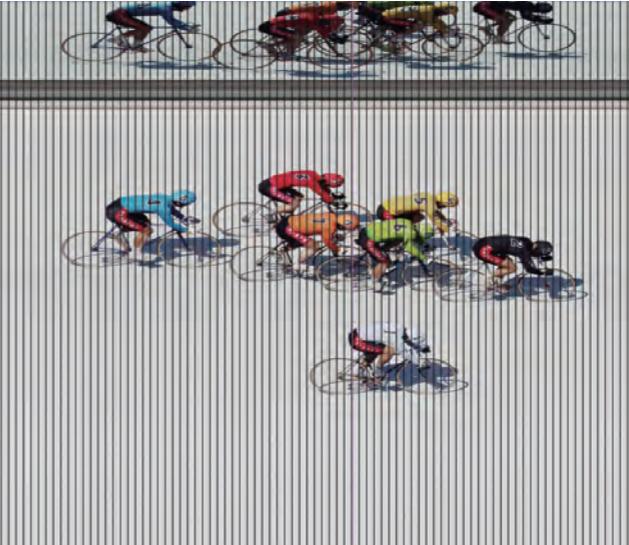
サイクルスポーツであることがあげられます。

JPFアスリート育成パスウェイでは幼い頃から自転車を乗り始め、少しづつステップアップしていくための道筋を示しています。このパスウェイに則り、当社が運営している競輪場やオートレース場では自転車振興活動を行っています。自転車をただの乗り物としてではなく、スポーツとして楽しみ身体能力の向上につなげていけるようさまざまなプログラムを用意しています。生涯スポーツである自転車をいろんなレベルの方々に楽しんでもらうことが我々のミッションであり、自転車をメジャースポーツへとつなげていくための取り組みです。

JPF | BUSINESS MANAGEMENT JPFの事業管理



私たちJPFは創業当時から写真判定業務を軸にさまざまな業務を展開してきました。写真判定業務や審判VTR業務に関しては公正安全に公営競技を実施していく上で必要不可欠な業務です。このような基幹業務がJPFを、そして公営競技を支え、広くいろいろなことにチャレンジできる環境を作っています。成長をモットーとする当社では新規事業の展開だけではなく、お客様から得られる信頼を確実なものにしていくために日々の業務に取り組んでいます。また、テクノロジーの進化に合わせて既存機器をアップデートし、より利便性が高く業務を効率化できるような取り組みや提案も行っています。



写真判定

旧社名は日本写真判定株式会社。社名に入るということは会社の根源でもあることを意味します。技術の進歩と共にデジタル化が進んでいますが、昔も今も変わらず「スリットカメラ」は当社の技術として残っています。ゴール線の延長線上に設置されたスリットカメラで、時間差がある選手のゴールの瞬間をスタッフが手動で撮影して一枚の写真に収めます。また、判定写真の提出がされないと公平なジャッジができないと判断され、レース不成立となってしまうこともあります。精度の高いカメラを活かす専門的なスタッフの技術が必要とされる業務です。

実況・放送業務

レース場や場外発売場でのライブ中継、地上波およびCS番組の放送、インターネットでの配信など、公営競技にとって放送技術は欠かすことのできない要素です。レース映像をはじめゴールの瞬間のスローVTR・着順などを場内のテレビや大型ビジョンに映し出します。加えて、スタート前の選手の表情やオッズの一覧、各種競技情報に至るまでレース場内のさまざまな映像を撮影・編集・送出しています。その他にもCSのシステム設計や司会業務など放送分野に関わる幅広い業務と実績を持っています。



審判VTR撮影業務

レースの公正安全な実施のため、各競技のレース終了後に審判による違反行為の審議が行われます。審議が審議の参考にするのはレースを撮影した映像です。レース終了直後に映像を確認し、違反行為の有無やペナルティの程度を決めます。当社はこのレース映像の撮影と審議への提供、お客様向けの審議VTRの制作を担っており、各競技に適したシステム構成で機材を設置し、公正かつ迅速に審議映像を提供しています。



CEO MESSAGE

CEOメッセージ



株式会社 JPF 代表取締役
渡辺 俊太郎
Shuntaro Watanabe

1990年 慶應義塾大学法学部法律学科卒業
1996年 弁護士登録
2002年 翼法律事務所開設
2007年 日本写真判定株式会社(現株.JPF)代表取締役就任
2013年 自転車ADRセンター 調定委員就任
2014年 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科トップスポーツマネジメントコース卒業
修士論文「競輪場が果たすべき役割についての研究」を発表
2017年 公益財団法人日本自転車競技連盟常務理事/理事(2017年~2023年まで)就任
2018年 一般財団法人日本サイクルスポーツ振興会 代表理事就任
2019年 公益財団法人日本サイクリング協会 理事就任

迷惑施設から街のシンボルへ

当社では“公営競技で街を元気に”というコンセプトのもと、これまで全国各地の競輪場やオートレース場を運営してきました。街を元気にするために、様々なイベントを行ってきました。その結果、競輪場は子どもたちの遊び場、成長の場、お父さんお母さんが安心して子どもたちを連れて来れる場所、おじいちゃんおばあちゃんが安心して遊べる場所としての価値を持っていることが実証できました。

その一つの集大成が千葉ドームと千葉公園です。迷惑施設だった千葉競輪場が千葉ドームに変わり、これをきっかけに千葉公園が再整備され、街のシンボルとなり地価も急上昇しました。まさに「競輪場の近くに住みたい」が実現しました。千葉競輪場をはじめ、各地の競輪場で得た知見を元に、これから全国の競輪場で、地域の人々に“競輪場のある街に住みたい”と思ってもらえるような取り組み・施設整備をしていくことが今後の当社の役割と考えます。



競輪場を子どもが集まる遊び場へ



まず自転車に限らずさまざまなスポーツに触れられる環境を整えます。スポーツをすることで身体能力が向上します。スポーツが得意な子どもだけがスポーツをするのではなく、苦手な子どもにもスポーツを楽しんでもらい「身体を動かしながら考える力を身に付けていく」環境をつくることも大切だと考えています。子どもの頃にどれだけ遊んだか、どれだけ新しいことにチャレンジしたのかが脳の発達に良いとされています。

子ども達が手軽に、安心してスポーツに触れられる環境は子育て支援にも繋がります。親子で一緒にスポーツを楽しむ。子どもの成長を見ながらカフェや飲食、美容を楽しむ。親御さん同士の交流や、アスリートとの交流ができる。このような環境の中で、サイクリスト・競輪選手を目指す子どもたち、応援する子どもたちが育っていきます。

競輪場がある街に住みたい

競輪場はお年寄りにとっても安心な場所です。「おじいちゃん、今日は競輪場だから安心」なんて話は良く聞きます。競輪の予想や、オッズの計算、仲間との競輪談義、レースの応援は認知症予防にも効果があるはずです。特に最近の傾向では、インターネット投票により来場者が減少し、競輪場に余剰スペースが生まれています。このスペースを使って、様々なスポーツ、レジャーを行う環境を整備することができます。

競輪場はこのような無限の可能性を持っています。当社はこの可能性を最大化して競輪場を中心とした街づくりを実現し、「競輪場がある街に住みたい」を目指します。

ACTIVITIES

各運営場の今

名古屋ケイリン



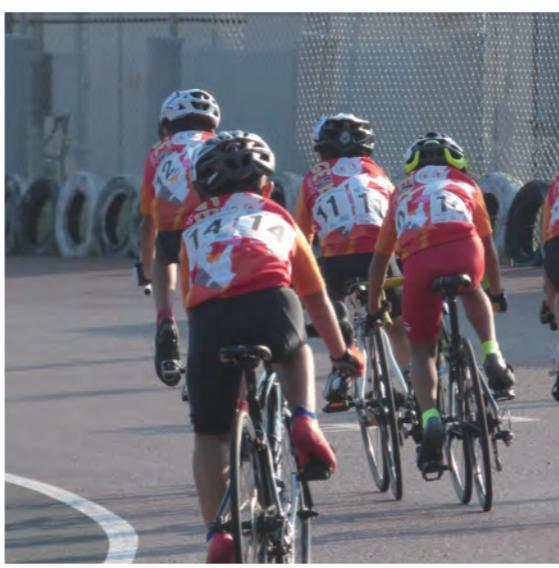
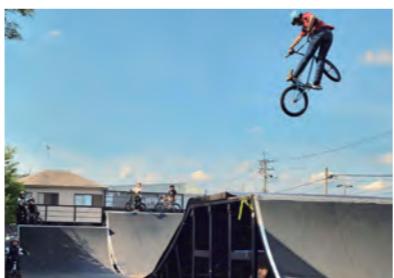
松阪ケイリン



DREAM STADIUM
Toyama



京都向日町競輪
KYOTO KEIRIN



マシン・スポーツオートレース
山陽オート

Wavepool

新たなビーチカルチャーの創造へ



なぜJPFがサーフィン事業を？と思われる方も多いでしょう。自転車競技におけるスキル向上には、オフロードバイクでパンプトラックコースを練習することが効果的です。このパンプトラックは自転車だけでなく、スケートボードやインラインスケートなど、多様なアーバンスポーツとの接点を生み出しています。また、アーバンスポーツといえば3x3バスケットボールなども含まれてきます。こうした流れの中で、当社が手掛ける事業は結果的にすべてチェーンのように繋がっているといえます。

アーバンスポーツから派生し、当社は新たな事業展開としてサーフィンに注目しました。東京オリンピックでサーフィンが正式種目となったことを受け、当社はトップクラスの造波技術を世界中に展開しているスペインのウェーブガーデン社と提携。この提携の背景には、ウェーブガーデン社が掲げる“サーフィン人口の裾野を広げる”という理念が、私たちJPFの目指す“サイクルスポーツの普及”というビジョンと共に鳴ったことがあります。競輪場再生からサイクルスポーツ振興へと事業領域を拡大していく中で生まれた、「地域との結びつきを強化する」「地域住民、地域経済にとってなくてはならない施設を育てる」という私たちの事業哲学の延長線上に、このウェーブプール事業もあります。ウェーブプール施設を単なるサーフィンのための施設にとどまらせ幅広い世代が集まることのできる複合集客施設とし、新たなビーチカルチャーの発信地となることで、地域レクリエーションと観光

産業の活性化、関係人口の増加を見込むことができ、地域活性に貢献できると考えています。これは、スポーツの力で地域活性および日本における新しいカルチャーの創造を手掛けっていく、JPFのフラッグシップ事業となる一大プロジェクトです。

その第一歩として滋賀県草津市烏丸半島の土地の優先交渉権を獲得し、動き出しました。烏丸半島は大阪市や京都市中心部に住む方でもアクセスしやすい環境にあります。

このような立地に施設を作ることもまた、都心部から地方へ人々が訪れるきっかけにもなり、地域活性化に繋がると考えます。私たちJPFは、スポーツを通じて地域を元気にするという理念のもと、このウェーブプール事業を手掛けています。

今年3月には本事業の推進を目的として、子会社「株式会社JPFサーフ（滋賀県草津市、代表取締役社長：久場善博）」を設立しました。



大多喜町

スポーツ×農業で持続可能な社会へ



当社では、「スポーツ×地域振興」にも力を入れており、大多喜町（千葉県）でさまざまな取り組みに挑戦しています。千葉県南東部の山間に位置する大多喜町では過疎化が進み、農業の担い手になる人手不足や耕作放棄地の増加などが問題視されていました。そこで大多喜町に着目したJPFは関連会社JPFagriを設立。大多喜町の問題点を改善し、農業を持続可能なものとするため、バスケットボール選手のデュアルキャリア形成を関連付けた取り組みをはじめました。

現在、スポーツ業界ではスポーツ選手の引退後のセカンドキャリアの形成が大きな課題となっています。選手活動を続けながらビジネスパーソンとしてのキャリアも形成できる「デュアルキャリア」の考えに賛同した私たちは、「大多喜町のヒーローになる」というコンセプトのもと、SDGs大多喜学園を拠点としたesDGzOTAKI.EXEという3人制プロバスケットボールチームを設立しました。選手はバスケットボールのプロリーグに参戦するかたわら、耕作放棄地での稲作や管理放棄竹林の整備に取り組んでいるほか、子ども向けのバスケットボールスクールの開催や近隣地域のごみ拾いなどの地域貢献活動も行っています。こうした取り組みが、スポーツ×農業×地域活性において好循環を生み出し、持続可能な事業になることを信じて私たちは活動しています。

JPFagriは、昨年7月から新たに公共のスポーツ施設である大多喜町B&G海洋センターの運営を受託。体育館やプール、野球場、グラウンド、テニスコート、柔道場などの運営業務

を行っているほか、町内外の方が多く利用できるよう、施設を活用した大会の開催やスクール事業にも取り組んでいます。



このように更なる施設活用を検討することで、令和8年度以降も継続した運営受託を目指します。また令和6年度部活動地域移行事業業務も受託。スポーツ庁及び文化庁が令和4年に策定した「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」に則った部活動改革も進めており、町内中学校の剣道部を対象に、土日・祝日の部活動指導を担っています。これらの活動の今後の展望として、年齢を問わず、さまざまなスポーツに初心者からトップレベルまでそれぞれの志向・レベルに合わせて参加できる地域に根差した「総合型地域スポーツクラブ」の設立を目指しています。

JPF | PEOPLE DEVELOPMENT

JPFの人材育成



多様な働き方が きっと個人の力を 引き出すきっかけになる

人が育つ会社が伸びる 未来が広がる

当社は、「人の成長機会を提供できる企業であり続けること」を企業理念として掲げています。社員一人ひとりが成長できる環境を会社が提供し、社員が成長していくことで、結果的に会社の利益にも還元されるという考えに基づいています。成長機会を提供する対象は社員のみにとどまらず、事業に関わるすべての方や地域の方々も対象としているため、常にこの企業理念を念頭に置きながら事業展開を行っています。私たちは、変化を恐れず、常に新しい挑戦を生み出す企業であり

続けることを目指しており、「好奇心・問題意識を持ち続け自ら考え積極的に行動する」ことを大切にしています。

同時に、社員同士が互いの個性や人格を尊重し、協力し合うことも大切にしています。「感謝の気持ちを忘れない」「楽しんで明るく素直に仕事をする」「自分と家族を大切にする」ことをモットーに行動しています。

JPFのロゴは、サイクルスポーツを象徴するトラックの形を基にした「インフィニティJ」というデザインです。このロゴは、無限の可能性を表現しており、私たちが持つ成長と挑戦の精神を象徴しています。



自ら考え、自ら動く その力がJPFを動かす

当社が求める人材は「自ら考え、行動し続けることができる人」です。社会情勢や仕事の流れを観察し、自ら改善点を見つけ、解決策を考え、実行に移せる人材を重視しています。そのうえで、自分の行動や決断に責任を持ち、自ら結果を追求することのできる責任感を持った姿勢が求められます。

また、周囲との協力を大切にすると共にリーダーシップを発揮してチームを引っ張る力も必要です。そのためには常に新しいことに挑戦し、学び続ける姿勢が大切です。また、予期しない状況に対しても臨機応変に対応ができる柔軟性を持った人材を求めていきます。

上記のような求める人材を育成する環境、活躍できる環境が整っています。意欲があれば入社して間もなく大きなプロジェクトを任せられることもあり、実際に成果を上げている社員も多数います。



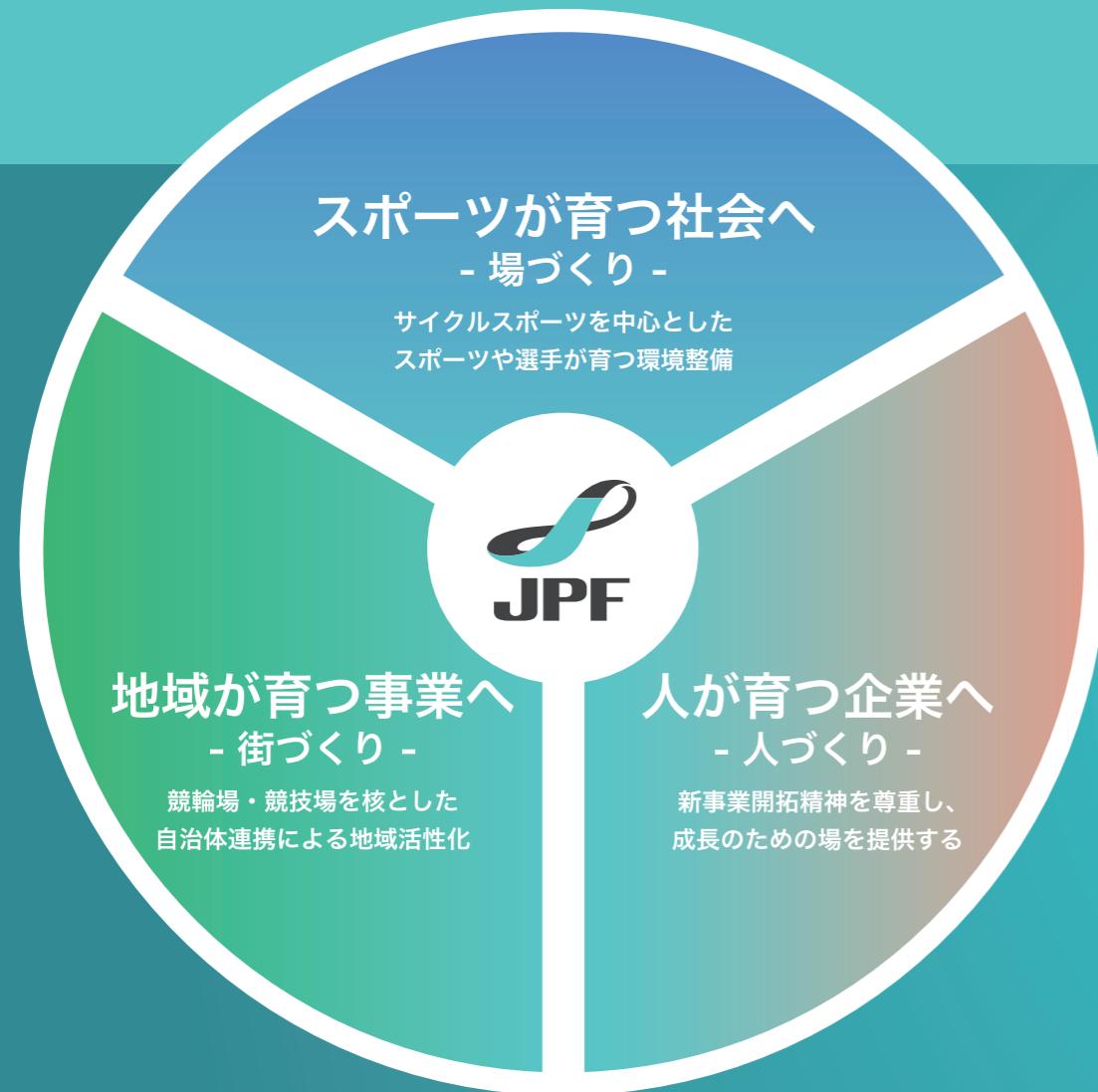
学びと実践で成長する

社員の成長を支えるために充実した研修制度を提供しています。研修は「知識習得」と「実践経験」を重視しています。

当社には自転車競技に関わってきた社員も在籍していますが、そうでない社員も多くいるため、まずは自転車競技に関する知識を習得する研修を行っています。競技経験者や業務担当者の座学研修をはじめとし、イベント運営を経験することにより自転車競技に対する理解を深めることができます。山梨マウンテンバイク研修では、実際にトレール整備を行い、コースづくりや運営の裏側を学ぶとともに、自転車業界の実情を知ることができます。

新入社員は、当社が包括運営を行っている競輪場やオートレース場で1か月間の現場研修を行います。この研修では、現場で必要なスキルを学び、現場で直面する課題に対応する力を養います。この包括場運営業務における実務経験を積むことにより、今後の公営競技の課題に対して常に問題意識を持ち、課題解決する力を養うことができます。このように、当社ではさまざまな研修を通じ、社員が成長できる機会を提供し続けています。

JPF VISION JPFのビジョン



JPFの中長期成長ビジョン

JPF 1.0
(創業時)

JPF 2.0
(第二次創業～拡大期)

JPF 3.0
(第三次創業)

	日本写真判定株式会社	株式会社 JPF
事業領域	写真判定業務	サイクルスポーツ振興
存在意義	公正な公営競技の運営	スポーツで地域を元気に
企業資産	判定写真技術	公営競技場包括運営
求められる社員像	プロフェッショナル・スピリット	チャレンジ・スピリット
ブランディング	技術への信頼・独自性	公営競技のスポーツ価値



JPF MISSION

JPFのミッション



さまざまなサイクルスポーツ振興

公営競技場運営で培ったノウハウやネットワークを活かし、全国各地の競輪場を拠点に、「自転車競技者の普及、選手の育成」「環境整備」「青少年育成」の3つの柱を掲げています。サイクルスポーツをより私たちにとって身近なものとし、生活に根づかせてゆくために、その振興に取り組んでいます。



競輪と競輪選手のステータス向上

競輪場を地域に根ざしたスポーツ施設にするとともに、国際基準の「ケイリン」ルールで争われる「PIST6」の運営や、スポーツベッティングの新しい可能性を追求するなど、新しいサイクルスポーツエンターテインメントを追求しています。



人と自然が共生する環境整備

放置竹林の整備や山林でのごみ拾いといった自然保護活動、耕作放棄地を活用した大多喜町でのお米作りによる地域の第一次産業再生など、持続可能な社会の実現に向けた活動を進めています。また自然を大切にすることや、環境への意識を変えていくための教育に取り組んでいます。未来の子どもたちに、自然を守り、自然と親しむことの大切さを伝えていきます。



絶え間ない新事業開拓精神

写真判定技術からスタートし、公営競技場の包括運営事業への進出を経て、その活動範囲をサイクルスポーツ全体に広げてきました。今後は、大規模スポーツ施設開発、さらには農業に至るまで、次々と新規事業を立ち上げ、自らの事業領域を拡大し続けていきます。



自治体連携による地域活性化

公営競技の運営を通じて、地域社会の発展に貢献することを考えながら、各自治体と連携し共に発展してきました。その歴史と強みを活かし、「街とそこに住む人々を元気に」するための事業や社会貢献活動を積極的に展開しています。



成長のための場の提供

社員の成長だけでなく、当社の事業を通じて、そこに関わる人たちと共に成長できる企業であり続けます。そのためには、思いついたらまずはやってみる、「考より行(こうよりこう)」を行動規範として掲げ、フロンティアスピリットを大切にしています。



